

インタラクションと表現のバリエーション

“the reason is because” と “the reason being” を中心に

八木橋宏勇

はじめに

言語を閉じた体系と見なさず、認知能力や、文化、社会、対人関係などと相互作用するダイナミックな存在と捉える言語理論は、総称的に「開放系言語学」と呼ばれている（唐須 2000）。開放系言語学の主要メンバーである認知言語学、社会言語学、語用論は、言語に特化した能力を想定していないという点で共通点はあるものの、当然ながら一枚岩ではない。前者は認知的営みに基づく言語能力に、後二者は言語運用に重きを置いた研究が盛んである。菅井（2022）は「言語能力という心的側面は言語研究におけるミクロ的な対象であるのに対し、言語運用という社会的側面はマクロ的な対象」と論じ、「言語の心的側面と社会的側面を一元的に捉えることはできないものであろうか」と提起している。本稿は、1) 他者とのインタラクション、2) 言語の心理的側面と社会的側面のインタラクション、という2つの側面から言語表現のバリエーションとその機能について論じる。

言語の心理的側面

認知言語学は、言語事実はある種の認知能力によって動機づけられているという立場をとっている。よく挙げられる例であるが、**The bike is near the house.**は自然に感じられる一方、**The house is near the bike.**に奇妙な不自然さを覚えるのは、**the bike** が図、**the house** が地という概念レベルでの非対称性が文構造に反映されていないからだと考えられる。つまり、客観的には同一であっても、概念レベルでの捉え方が文構造に反映されていないと違和感を覚えるということである。このように、図と地の分化は、言語表現の認知的基盤になっていると考えられるわけである。

言語の社会的側面

図と地の分化は、他者とのインタラクションという、言語の社会的側面にも見出すことができる。菅井（2023）は、図と地の調和は情報理解の安定性をもたらしており、仮に地が欠けて図だけが具現した場合、唐突感を覚えることを指摘している。

- (1) A: Which do you like better, tea or coffee?
B: I like tea better than coffee.

脈絡もなく **I like tea better than coffee.**と発話される場合に比べ、上記のやり取りにおける **I like tea better than coffee.**の方がごく自然であると判断される。これは、**B** が **A** の発話を地として利用することで、図として新情報をスムーズに導入することに成功しているためである。

他者とのインタラクションにおける「図」と「地」

以上のように考えると、言語の社会的側面（他者とのインタラクション）は言語の心理的側面（言語使用者の内面で作用している認知的営み）に組み込まれることになる（菅井 2023）。言語表現には、ときに破格と評されるバリエーションが観察されることがあるが、破格であったとしても、認知的に合理的処理がなされている可能性が高い。**the reason is that...**という構文的パターンの振る舞いを例に考えてみる。

山梨（2000）が指摘するように、(i) 新情報を構成する部分は図、旧情報を構成する部分は地、(ii) 断定されている部分は図、前提とされている部分は地、とすると、**the reason is that SV** の情報構造には、以下のような図と地の分化を見いだすことができる。

The reason... is that...
前提：旧情報（地） 焦点：新情報（図）

この **the reason is that...**には、**the reason is because...**という破格的バリエーションがあることが知られている

(詳細は八木橋 (2019) 参照)。BNC と Wordbanks の検索結果によると、地である the reason と補文標識の物理的距離が広がれば広がるほど、because パターンの容認度が高まる。

主語名詞句 the reason によって、that 節の情報価値が「理由」であることに定められることからわかるように、地として機能する the reason 句があつてはじめて、that 節は図という認知的際立ちを与えられ新情報としての役割を担う。the reason を修飾する情報が多くなると the reason と that の間の物理的距離が大きくなり、その照応的な構造的関連性という強度が薄められ、図と地のバランスにゆらぎが生じる。つまり、図として(理由という)新情報をマークする that に対し、その背景として機能する the reason が担う地の機能が大幅に弱まるわけである。このように、文構造が煩雑になって情報処理に係る認知的負荷が高まると、that に代わり because を用いることで、弱化した地の機能を反復照応的に再び活性化させていると考えられる(八木橋 2022)。これは、他者とのインタラクションにおいては、理解を促す配慮として機能していると言える。

また、他者とのインタラクションにみられる言語現象は、(文を基本単位と見なす観点からは) elliptical (省略的) で fragmentary (断片的) に見えるという指摘がある (Garrod and Pickering 2004, Hopper 2001)。次の例は、the reason is that... のバリエーションの一つ、the reason being is that... を基盤にしたやり取りである。

(2) Mr. McCollum: And the reason being?

Mr. Hubbell: I was informed by Mr. Nathan and Dave Margolis that in order to prevent paperwork from coming to my office regarding this matter , I needed to recuse the entire office.

(U.S. Government Printing Office 1996、下線は筆者)

(3) Mr. Michel: And the reason being?

Mr. Weaver: The reason being, if I remember correctly, and I would like to be able to correct this if I am wrong, basically was the dissatisfaction of the AFL-CIO with the general conduct of things in the ICFTU.

(U.S. Government Printing Office 1969、下線は筆者)

the reason being is that... が一定の頻度で用いられる構文であると仮定すると、いずれの例もその一部分が切り出され断片的に用いられているが、(2) は (1) 同様に図と地の分化が、(3) は相互作用的連携の発現としての響鳴が観察される。(文にはなっていないという意味で)断片的であったとしても、やり取りがスムーズに展開されていることから、インタラクション上の機能は十分に果たされていると言える。文にみられる完全体は、断片を融合させて規範的に創り上げられたものとも考えられるわけである (Hopper (2001) を参照)。

まとめ

インタラクションといえ、言語の社会的側面として主に社会言語学、語用論で扱われてきたが、言語の心理的側面から見れば、参与者それぞれが主体的に関わる「個を超えた一つのシステム」という様相も見て取ることができる。当然のことながら、文を分析の基本単位とするだけでは不十分であり、言語の心理的側面と社会的側面を一元的に捉える視座がやはり必要であると考えられる。

参考文献

1. U.S. Government Printing Office (1969) *Departments of Labor and Health, Education, and Welfare Appropriations for 1970-Part 1*.
2. U.S. Government Printing Office (1996) *The Failure of Madison Guaranty Savings and Loan Association and Related Matters-Part 4*.
3. Garrod, Simon and Pickering, Martin J. (2004) "Why is conversation so easy?" *Trends in Cognitive Sciences* 8(1), 8-11.
4. Hopper, Paul J. (2001) "Grammatical constructions and their discourse origins: Prototype or family resemblance?" Martin Pütz, Susanne Niemeier, and René Dirven (eds.) *Applied Cognitive Linguistics I: Theory and Language Acquisition*. Mouton de Gruyter, 109-129.
5. 菅井三実 (2022) 「心と社会をつなぐことばの力」(社会と心に向かう言葉学②)『日本語学』vol. 41-2. 明治書院, 80-81.
6. 菅井三実 (2023) 「ことばの心理的側面と社会的側面のインタラクション」(社会と心に向かう言葉学④)『日本語学』vol. 42-2. 明治書院, 122-123.
7. 唐須教光 (編著)(2000)『言語学 2』(英語学文献解題 第2巻) 研究社.
8. 八木橋宏勇 (2019) 「母語話者の内省とコーパスデータで乖離する容認度判断—the reason... is because... パターンが妥当と判断されるとき—」森雄一・西村義樹・長谷川明香(編)『認知言語学を紡ぐ』くろしお出版, 71-89.
9. 八木橋宏勇 (2022) 「the reason ... is because ... パターンにみる「地」を強化する「図」の機能」菅井三実・八木橋宏勇 (編)『認知言語学の未来に向けて』開拓社, 87-96.
10. 山梨正明 (2000)『認知言語学原理』くろしお出版.